

厚生労働科学研究費補助金(認知症政策研究事業)
認知症の人やその家族の視点を重視した認知症高齢者にやさしい薬物療法のための研究
分担研究報告書

高齢者の処方傾向の推移 調剤薬局の処方データ比較(2014-2019)

研究分担者 鈴木裕介 名古屋大学医学部附属病院 地域連携・患者相談センター

研究要旨

本年度の研究においては高齢者に対する処方実態の経年的傾向を把握することを目的として、2014年と2019年の一か月間の調剤薬局の処方内容の解析を行った。処方薬剤数およびポリファーマシー比率は減少したがPIMs(Potentially Inappropriate Medications)の比率は増加が観察されその傾向は最も高齢の群で顕著であった。PIMs処方リスクには地域差がうかがわれ、リスク要因としての年齢、性別にも経年変化が観察された。薬効別のPIMsとの関連に関しては、超高齢者群(85歳以上)において関連薬剤の顕著な増加が観察された。以上の結果より患者の高齢化に伴う多病化がPIMsに関連する薬剤の処方リスクを増加させていることが示唆された。

A. 研究目的

昨年度までの研究において、PIMsと関するのがポリファーマシーであること、PIMsと最も強く関連する中枢神経系の薬剤処方リスクが抗認知症薬の処方によって顕著に低下することを確認しこれを報告した。本年度の研究においては高齢者に対する処方内容PIMsと関連する因子の経年的傾向を把握することを研究の目的とした。

B. 研究方法

全国の調剤薬局のデータベースの65歳以上の処方箋記録から年齢、性別、処方薬剤数、日本老年医学会の高齢者に特に慎重を要する薬物リスト(JGSリスト)のPIMs)に含まれる薬物(用量)に該当する薬剤の処方状況とそれと関連する属性の比較を行った。2014年 10

月1日～31日、2019年12月1日～12月31日の各1か月間に全国の、処方箋調剤薬局チェーンで調剤を行った全ての65歳以上の患者を対象とした。(2014年: 180,673名、2019年: 333,869名) 処方薬剤数、ポリファーマシーの比率、PIMsの比率、PIMsの処方に関連する要因について2014年と2019年の比較を行った。

(倫理面への配慮)

対象となる高齢者に対しては研究の主旨を説明した上で同意を取得した。個人のデータは匿名化を行い守秘義務に対する配慮を行った。本研究は名古屋大学医学部生命倫理委員会において承認を受けて実施された(承認番号: 2019-0356)

C. 研究結果

65歳以上の患者平均年齢は増加が観察された(75.6歳→76.3歳 $p<0.001$)。平均処方薬剤数はすべての年齢群において有意に減少、同様に多剤併用率(5剤以上のポリファーマシー、10剤以上のハイパーポリファーマシー)もすべての年齢群で有意に減少が観察された。(図1)一方でPIMsの処方率はすべての年齢群で有意に増加が観察され、この傾向は超高齢群(85歳以上)で最も顕著に観察された(図2)PIMsを説明する要因(ロジスティック回帰分析において、2014年の処方内容の解析では年齢はリスクを下げる、女性はリスクを上げることが確認されたのに対して、2019年は年齢がリスクを上げる、女性はリスクを下げることを確認された。2019年の解析において薬局の所在地を変数に投入した場合、PIMs処方リスクの明確な地域差も観察された。両年とも処方薬剤数はPIMsリスクと有意に関連していることを確認した。PIMsと関連する薬剤の薬効別解析では超高齢群において2014年の解析ではPIMと関連する薬剤が1剤だったのが2019年では5剤に著増が観察された。

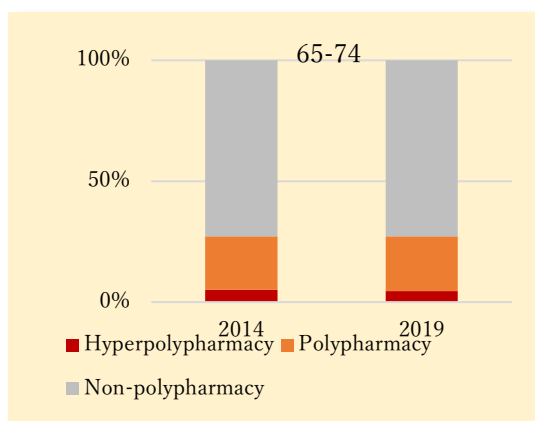


図1(a)65歳～74歳 $p<0.001$ chi-square test

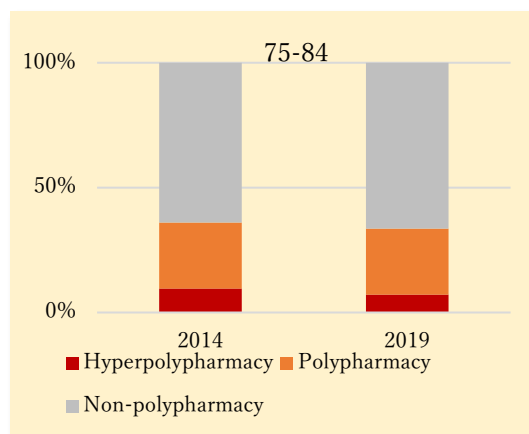


図1(b)75歳～84歳 $p<0.001$ chi-square test

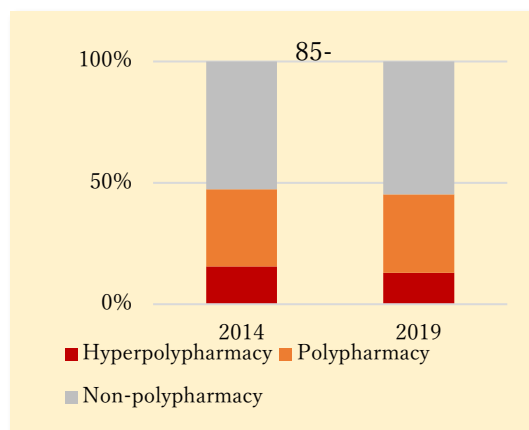


図1(c) 85歳以上 $p=0.002$ chi-square test

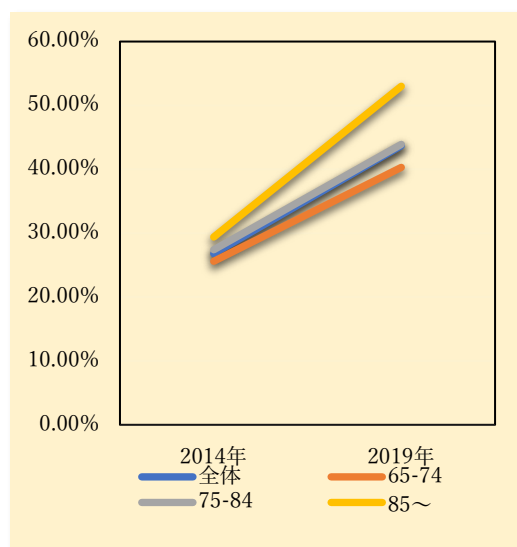


図2 PIMsの年代別処方率の推移

D. 考察

平均薬剤数の減少とともにポリファーマシー比率が減少したことは近年の多剤併用の弊害に対する実臨床における意識の高まりを反映している可能性が示唆される。一方、すべての年代におけるPIMs比率の増加は懸念材料であり特に超高齢者群(85歳以上)のPIMs比率の増加が顕著なことは患者の高齢化→多病による処方薬剤数の増加のみではなく、老年期に特有な病態への薬物療法の適正性に関する注意を喚起するが、本研究においては病態に関する患者情報がなく推察の域にとどまる。PIMs処方リスク、ベンゾジアゼピン処方率とも地域差が大きく、処方の適正化に関する意識の均てん化が望まれる。この5年間に年齢と性別においてPIMsリスクの逆転がみられ、加齢と男性においては安全な薬物療法に対するより一層の配慮が求められる。超高齢群におけるPIMs関連薬剤の増加は超高齢群における病態の多様化を反映している可能性を示唆する。

E. 結論

全国の調剤薬局の65歳以上に高齢者の処方内容を5年の間隔を置いて調査した。処方薬剤数およびポリファーマシー比率は減少したがPIMs比率は増加が観察されその傾向は最も高齢の群で顕著に観察された。PIMs処方リスクには地域差、リスク要因としての年齢、性別にも変化が観察された。今後はより高齢な男性患者における病態の多様化によるPIMs処方リスクに対する意識の向上が求められる。

F. 健康危険情報

本研究に関して健康の危険に関する情報は

ない

G. 研究発表

1. 論文発表

1. Suzuki Y, Sakakibara M, Shiraishi N, Komiya H, Akishita M, Kuzuya M. Use of Anti-Dementia Drugs Reduces the Risk of Potentially Inappropriate Medications: A Secondary Analysis of a Nationwide Survey of Prescribing Pharmacies Dement Geriatr Cogn Disord <https://doi.org/10.1159/000512043> 2020
2. Umegaki H, Suzuki Y, Yamada Y, Komiya H, Watanabe K, Nagae M, Kuzuya M. Association of the qualitative clock drawing test with progression to dementia in non-demented older adults J. Clin. Med. 9, 2850; doi: 10.3390/jcm9092850 2020

2. 学会発表

1. 鈴木裕介、白石成明、榊原幹夫、小宮仁、葛谷雅文 処方箋調剤薬局の処方内容の全国調査—坑認知症薬の処方実態と高齢者に特に慎重を要する薬剤との関連性の検討—第62回日本老年医学会学術集会 2020年8月5日 東京(Web参加)
2. 渡邊一久、梅垣宏行、藤沢知里、柳川まどか、鈴木裕介、葛谷雅文 軽度認知障害または軽度認知症患者における潜在的な不適切処方に関連している因子の検討 第62回日本老年医学会学術集会 2020年8月6日 東京(Web参加)

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む) なし